

「談話」という学術用語への不満¹

城 生 佰太郎

【キーワード】 談話分析、会話分析、音声学、脳科学の援用

1. 緒言

もう30年以上も昔の話になるが、若き日の私ははじめて「談話」という専門用語を耳にした。もちろん、そこから即座に私を感じ取ったのは、音声言語を対象とする音声言語に特化した音声言語のための研究以外の何ものでもないという確信であった。

しかしながら、事実は違っていた。なぜなら、当時は久野暲(1978)などに代表されるように、「談話」は文法論の1種であって、ほとんどの目に付く対象は文字言語になっていたからにほかならない。この不条理さのためか、用語のほうも矢継ぎ早に、テキスト文法、テキスト言語学、談話文法、選択体系機能文法、ディスクール、クリティカル言語学…と雨後の竹の子のごとく膨張を続けていったのである。

古くから、「羊頭狗肉」ということばがあるように、看板と中身が一致していないのはどうにも気持ちが悪い。学問だから、この程度の食い違いがあっても世間やマスコミから叩かれることはないのだろうが、たとえばこれが食品であつたら大変な社会問題となること疑いない。いわゆる「偽装問題」ということになる。

そのようなわけで、本稿では筆者の感じた談話分析というもののありかたを一音声学者の視点から描述し、特に日本語教育に従事する諸氏に、この件に関する再考をお願いしたい次第である。

2. 辞書的意味

まずは、「談話」の一般的意味から確認をしておこう。そこで、手もとにある国語辞典で「談話」を調べてみると、次のような記述になっている。

1) 本稿は、「言語学的研究方法論の日本語教育への応用」(共同研究者：川口良)と題する共同研究費の交付を受けて行われた研究成果の一部を文字化したものである。この場を借りて、関係諸氏に対し篤く御礼申し上げる。

談話

- ①話をすること。くつろいで会話を交わすこと。「友人と一する」
- ②ある事柄についての非公式な意見。「首相の一」

三省堂『大辞林』第2版(1995)より引用

要するに、第一語義では音声言語に限定された意味内容を確認することができるが、派生語義では、情報源としては音声言語だが、内容としては結果的に必ずしも音声言語に限定されるものではなさそうであるということが窺知される。

次に、専門書によって言語学における「談話」の定義を調べると、次のようになっている。

いくつかの文が連続し、まとまりのある内容をもった言語表現を談話という。話されたもの、書かれたものの両者を含む。たとえば、日常会話、スピーチ、ニュース、手紙、小説、広告文など、このほか、文が連なったものではないが、注意書（例：「禁煙」）や標語、看板、あるいは俳句など、一文（語）からなるものも広く談話に含められることが多い。

談話は、テキスト（text, テキストとも）と同義で使われることもある。その場合、「テキスト」はヨーロッパ系の研究者が、「談話」はアメリカ系の研究者が用いる傾向がある。一方、談話とテキストを別概念とすることもある。この場合は、「話されたもの」対「書かれたもの」、「表現・理解行為」対「(音声・文字で)産出されたもの」、あるいは、「発話としての実現物」対「抽象的構成体」などといった区別がなされる。また、テキストは談話を構成する要素であるとみる人もいる（以下、本稿では両者を特に区別しない）。

国語学では、談話に当たる概念として「文章」という用語が用いられている。書かれたものをさすことが多いが、話されたものを含めることもある。

談話は、語や文と異なり、常に具体的な場(field, →場面)があって成立するものであり、いわばパロールの領域に属するものといえる。したがって、談話にあっては広い意味での文脈(コンテキスト)、すなわち、1)場面的(社会的)文脈(situational

context)と、2)言語的文脈(verbal context)が常に関わっている。談話の研究は、このような文脈の中における言語表現の機能、その構成、参加者(話し手・聞き手、読み手・書き手)との関わりなどを問題とする。

三省堂『言語学大辞典第6巻 術語篇』より引用

要するに、単位が意味的まとまりを対象とするものであるところから、その規模は必ずしも一文にとどまらず、文以上の文集合に対しても考察を広げるといふ点では共通理解ができているものの、表現媒体は必ずしも音声言語に限定されるわけでもないことが、ここからわかる。

3. 談話分析の得失

というわけで、談話というもののアウトラインを素描したので、次に筆者の視点から捉えた談話分析の得失(功罪)について、簡単に述べることにする。まずは、失の部分からはじめる。

上に述べた意味内容から判断すると、筆者としては主に次の3点にすっきりしない引っ掛かりを覚える。

1) 単位認定

音声学や言語学では、すでに定着している分析上の諸単位がある。たとえば、母音、子音、音節、音素、形態素…などである。しかしながら、談話の場合は、拠って立つ基盤が「なんらかの意味的まとまり」という甚だ思弁的なレベルになるので、どのような条件を備えたら談話分析の確固たる対象となしえるのかといった客観的な判定基準が、はなはだ曖昧で非科学的である。

2) 研究対象

先行研究によると、談話は実にさまざまな側面から分析できることを謳っている。たとえば、一語文や標語、格言、俳句などの短いものから、何冊ものシリーズから成る膨大な量の一作品に至るまで千差万別であり、またそこで取り上げられる言語データも、方言差、性差、年齢差、帰属する社会構造の差、文体差、時代差、音声言語と文字言語の差、独話と対話…など、枚挙に暇がないほどの広がりを見せている。

このように列挙して改めて眺めなおしてみると、これでは「何でもあり」のまさにゴミ箱的存在なのではないかとさえ、疑いたくなる有様である。

3) 研究方法論

科学的研究方法論には、古くからボトムアップによる事象探査型の帰納的方法と、トップダウンによる仮説検証型の演繹的方法の別が知られている。言語研究の事例に即して具体的に述べれば、音声学、記述言語学、言語地理学などは前者の代表的なものであり、理論言語学や一部の比較言語学などは後者の例となる。

これに対して、談話分析はどのような方法論を採択するのかと考えると、答えが明確には得られない。すなわち、上述したように研究対象が多岐にわたっているために、それぞれに対応するためにとられる方法論も、多様性を迫られるからにほかならない。

次に、得の部分について簡単に述べておく。

1) 談話文法

一文だけを考察の対象としていたのでははっきりしない現象に対して、文集合の視点から新たな説明が得られたという点は、言語研究にとって大きな進展であった。

この結果、たとえば新情報と旧情報の別で知られる主題と情報構造の問題や、視点(point of view)、結束性(cohesion)、さらには語用論への貢献としてダイクシス(deixis)などの研究成果をもたらした。

2) 談話の構造

筆者の専門分野では、論文の章立てが原則として次のようになっている。

序論	研究動機
第1章	研究目的
第2章	研究方法論
第3章	実験結果
第4章	考察
第5章	残された課題と将来の展望註および参考文献

これなどは、まさに1篇の著作を通した、首尾一貫性のある論述の流れを示すものであり、談話における全体の構造を明示したものにほかならない。同様にして、古来、「起承転結」として知られる筋立ての方法も、談話の巨視的構造を示したものと考えることができる。

このように、談話研究によって従来は必ずしも明確に捉え切れなかった作品全体を見通す、巨視的な構造が捉えられるようになったことは、談話研究における大いなるメリットである。

3) 会話分析(conversational analysis=CA)

CAは、1960年代末期にE.GoffmanとH.Garfinkelという社会学者たちによって、基礎が築かれた。なぜ社会学かといえば、そもそもの発端がロスアンジェルス自殺防止センターで自殺相談の電話を分析するという作業をとおして気づかれた視点だったからにほかならない。

その後、Harvey Sacksを中心にしてCAの研究は進展するが、不幸にしてSacksは1975年に事故死で他界し、その後をE.A.Schegloffらが引き継いで今日にいたっている。日本語教育では、発話の場面を仕切る際のマーカーとして「順番交代(turntaking)」が特に顕著に取りざたされており、CA分析に対する関心も深い。

しかしながら、この方法が音声学ではなく社会学の枠組みで開発されてきたという点に、筆者としては看過しがたい問題がいくつかある。

まず第1に名称である。音声学では、2人の間で交わされる音声情報は「対話dialogue」である。3人以上になれば「会話conversation」となる。したがって、CA分析にはDA分析(dialogue analysis)も含まれていることとなり、学術用語としては問題がある。

次に、音声言語を分析する際には、収録された音響データだけを分析しても、なかなか真理には迫れないという落とし穴がある点である。このことは、社会学者には想像を絶することであろうが、ヒトは音声情報処理をする際には、およそ考えうるありとあらゆる手段を用いている。このことは、次節に述べるが、ここではキーワードだけを並べておくと、視覚情報処理、脈絡情報、マガーク効果、ミッシング・ファンダメンタル、カクテルパーティー効果、などで

ある。

以上のような不備はあるものの、いわゆるCA研究によって従来の談話研究が見落としていた音声言語による諸問題が言語分析の俎上に載せられることとなったという点は、大いなる前進であった。

4. 音声学と自然談話

音声学は、言語音に特化した学問であるところから、いわゆる自然談話に関する分析は得意中の得意とするところであろうと思われがちである。しかし、事実は異なる。なぜなら、相手に気づかれずに録音を録らないかぎり、録音機に収録されるのは「よそ行きの音声」にほかならないからである。また、近年は著作権等がやかましく論じられるご時勢となってしまったため、相手の許諾を得ない限りは、仮に自然談話の収録に成功したとしても、これを論文化することができないというのも、自然談話の研究を難しくしている一因となっている。

このため、特に実験音声学的研究では、多くの場合、分析用のデータは被験者に単語カードや文などを読み上げてもらい、これを収録するという方法が主流となっている。したがって、厳密な意味ではこのようなサンプルを「自然談話」とは言いがたいということになる。ただし、機器を用いなくても可能な方法論のひとつである調音音声学による記述言語学的方法を採択すれば、かなりの確率で生の自然談話を記述することは可能である。

さて、音声学における研究方法には、城生佰太郎(2008:15-17)でも述べているように、

- (1) 調音音声学
- (2) 音響音声学
- (3) 聴覚音声学

の3大方法がある。すなわち、(1)は人が口・鼻・のどなどを用いて言語音を産出する過程を扱い、(2)は口唇から空気中に放射された言語音を、専ら音響物理学的側面から扱い、(3)は聞き手の鼓膜に到達した音波が、聴覚情報処理系の営みによって意味理解されるまでのプロセスを扱うことになっている。したがって、当然のことだがこれらのうちでもっとも重要なのは(3)であるということになる。

しかしながら、長い音声学の歴史の中で、(3)が登場したのはごく最

近のことであり、さらに、(2)でさえも長く見積もって高々100年ほどの歴史しかない。ここから、音声学といえはすぐに調音音声学が想起されるのも、ある意味ではやむを得ないことなのかもしれない。

実験音声学の分野に限ってみると、現在のように脳波を直接観察して聴覚実験が行えるようになるまでは、実験といえはほぼ音響音声学の実験を意味していた。時期的には、1950年代後半から1990年代末期ごろまでのおよそ40年間は音響が主流の座にあった時代である。

この時期には、たしかに音響解析用のツールが飛躍的に進歩を遂げたおかげで、いろいろなことが見えたことも大きな動因となって、音響データさえ綿密に分析すれば、音声にとって不可解な問題はすべてクリアされるという妄想が、多くの研究者の脳裏にこびりついていた。

ところが、こうした風潮からみれば真逆の方向とも思える、思いも寄らぬ事実の指摘が、心理学者の研究から浮上してきた。そのひとつに、イギリスのマガーク(H. McGurk)とマクドナルド(J. MacDonald)が1976年に雑誌*Nature*に発表して国際的に注目された「マガーク効果」という現象がある。たとえば、/ga/と調音したモデルの顔をアップで撮影し、これに編集の段階で人工的に/ba/という音声をはめ込むと、この奇妙な音響と映像のシンクロナイズした映像を見た人たちは、迷わず/da/と聞くという事実の指摘である。

ここから新たに見えてきたことは、音声と言うものはただ単に聴覚のみによって情報処理されているのではなく、視覚情報や、さらに場合によってはその他もろもろの、およそ有益と見られるありとあらゆる情報を総動員して認知理解されているのだということである。別言すれば、言語音というものは耳だけで聞くものではなく、脳の働きによって認知理解するという「鋳直し」を行っただけで主観的に「聴く」ものであるということにはほかならない。

なお、類例として、ミッシング・ファンダメンタルとか、カクテルパーティー効果などを挙げることができる。前者は、2,000 Hz, 2,200 Hz, 2,400 Hz, 2,600 Hz というように、すべて基本周波数200 Hzの倍音からなる4種の音を足し合わせると、被験者にはそこに含まれていない200 Hzの高さが聞こえてしまうという現象である。また、後者は聞きたい情報とか、良く知っている人の声などは、雑踏の真只中であってほんのわずかな音量しかない場合でも、被験者には識別できてしまうという不思議な能力をさす。

以上のような事実から、音声をとらえる際に音響解析だけを仮に100

%やり遂げたとしても、ヒトの言語音は到底とらえ切れるものではないということが窺知されよう。すなわち、脳の働きに注目することによって、与えられた刺激音の中から母語話者がどのような言語音としてそれをとらえるかが最も重要なポイントであるということになる。

5. 結語

以上に述べてきたもろもろの事柄を踏まえて、談話研究はどのようなべきか?という問いかけに対する現時点での回答を示すとすれば、次の4点にまとめることができよう。

- (1) 談話研究は、まず第1に発話されたコーパスを用いた研究でなければならない。すなわち、文字言語を当面の分析における一次資料としてはならない。
- (2) 発話された資料は、可能な限り同録した映像資料との摺りあわせをおこなうことによって、音響情報以外の諸情報にも気を配ることを忘れてはならない。
- (3) 音声によるコミュニケーションを、発話者の数に注目して分類する際には、1人を「独話」、2人を「対話」、3人以上を「会話」とする。なお、「談話」という術語はこのような側面からの分類には使用しない。
- (4) 音響解析を行う際に、ToBIのような方法には十分な注意を要する。理由は、第4節に述べたとおりで、物理データのみに関心し過ぎることの危険性が、その主たる根拠である。

【参考文献】

久野 暉(1978)『談話の文法』、大修館書店

城生 佰太郎(2008)『一般音声学講義』、勉誠出版

McGurk, Harry and MacDonald, John(1976)"Hearing lips and seeing voices", *Nature* 264(5588): 746-748

(本学教授)